

探偵小説におけるテキストの不安

Agatha Christie

The Murder of Roger Ackroyd

余白の可能性を読む

内田隆三

探偵小説におけるテキストの不安

～クリスティーの『アクロイド殺し』～
余白の可能性を読む

- 0 アガサ・クリスティーの肖像
- 1 アクロイド殺し
- 2 ポワロの推理
- 3 語り手は嘘をつかない
- 4 余白の可能性
- 5 テキストの不確定性

Bibliography

Copyright ©2010 by Ryuzo UCHIDA

0.1 Agatha Mary Clarissa Christie

(1890－1976)

- ①1890年9月，英国南西部の保養地，[デヴォン州・トーキー](#)（[Torquay](#)）で，Frederick A. Millerの娘として生まれる。
- ②ヴィクトリア朝のミドルクラスの標準では[大きな家](#)で，祖母，父・母，兄（Louis Montant），[姉](#)（Margaret: Madge），ばあや，後にフランス人の若い女性家庭教師らとともに育つ。
父はクリスティーが11歳のときに死ぬ。姉は夫のJ・ワット氏とともにクリスティーとの関係が深い。
- ③1912年10月，[Archibald Christie](#)中尉と出会う。1914年12月に結婚，1928年10月に[離婚](#)する。
- ④1926年の春に『アクロイド殺し』が刊行されるが，同年12月にクリスティーは[失踪事件](#)を起こす。

0.2 デビュー作

～The Mysterious Affair at Styles～

『スタイルズ荘の怪事件』: 第1次大戦中の1916年に執筆をはじめ。米(1920)英(1921)で、The Bodley Head から刊行される。

- ① **被害者**: 田舎地主 (country squire)
- ② **犯人の動機**: 財産横領 (+ 階層的な怨恨)
- ③ **探偵**: 第1次大戦の亡命ベルギー人
⇒ 元警察官 / 卵型頭部の小男: ポワロ
- ④ **語り手** = 探偵の友人: アーサー・ヘイスティングズ

0.3 スタイルズ荘の怪事件

クリスティー探偵小説の“プロトタイプ”

① ヴィクトリア朝の閉じた空間

- ・エセックス平野の村《another world》へ迷い込む.
- ・Styles Court ⇒ …Abney Hall／1847年築

② 意外性

- ・アリバイ工作: 臭化カリウム＋水＋ストリキニーネ
- ・一事不再理の制度
- ・変装 ⇒ 人間の同一性の不確かさ

③ 階層性

- ・被害者／犯人＝主人／近傍の存在(友人・使用人…)

④ 財産横領

- ・動機の一般性
- ・紆余曲折を経て財産が「正当な継承者」に戻る物語

0.4 探偵エルキュール・ポワロの登場

ポワロのイメージ：探偵の聖痕

①ポワロの外形的な特徴は「卵型の頭」で、左右対称の髭」があり、「小男」とされる。服装には彼のとても「几帳面な性格」が表現されている。

⇒ “*Poirot Investigates*” の UK・初版表紙
(The Bodely Head, 1924).

⇒ この肖像画は、1923年に《The Sketch》誌に登場した。一連のポワロの”短編物シリーズ” のために、W. Smithson Broadhead が描いたという。

②亡命ベルギー人(外国人という設定)。

③ベルギーでは元警察官。

1.1 『アクロイド殺し』の献辞

*To Punkie,
who likes an orthodox detective story,
murder, inquest, and suspicion falling on
everyone in turn!*

- ①探偵小説ファン: Punkie
- ②警告: 登場人物全員に容疑がふりかかる
- ③ orthodox ?

1.2 ロジャー・アクロイドという人物

①村の中心人物

- a) 典型的な田舎地主 (local squire). 赤ら顔で愛想のよい40代. 教区基金に気前よく寄付.
- b) 荷車の車輪製造で成功した人物 (self-made man), 私生活ではケチの噂.

②不運な結婚

- a) 青年時代: 年上の未亡人のペイトンと恋愛結婚. 彼女はアルコール依存で4年後に死ぬ.
- b) 現在: フェローズ夫人と再婚の噂. 彼女も死んだ夫が酒乱でその犠牲者となった.

1.3 容疑者の空間～近傍と周縁～

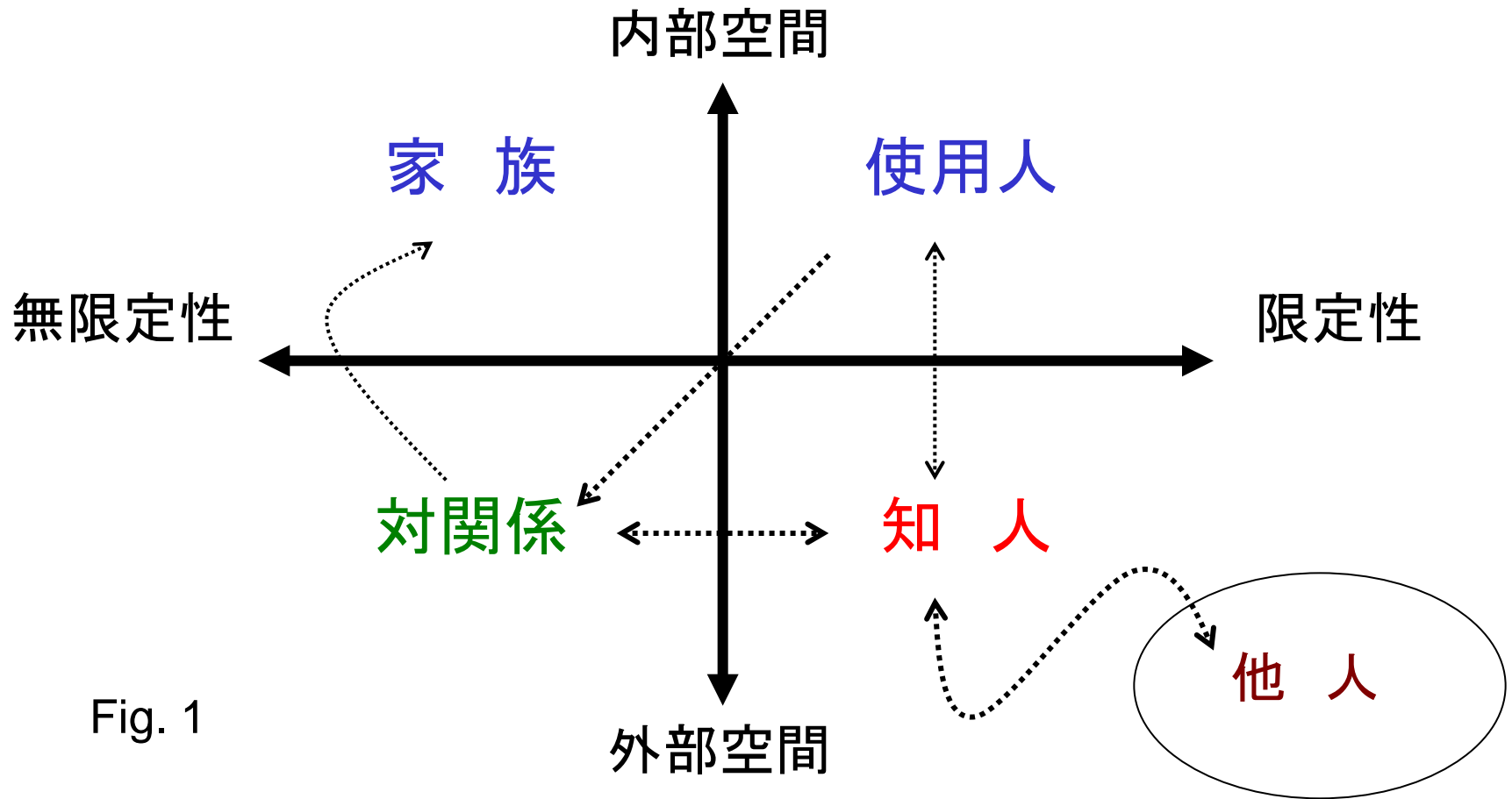


Fig. 1

1.4 都市の不安

～二つの言説がたわむれる場所～

①犯罪報道 $f: x \rightarrow y$ <遠い人>が近い

②探偵小説 $g: y \rightarrow x$ <近い人>が遠い

①+②: 都市の不安: $x \rightleftharpoons y$

見知らぬ領域
(群集)

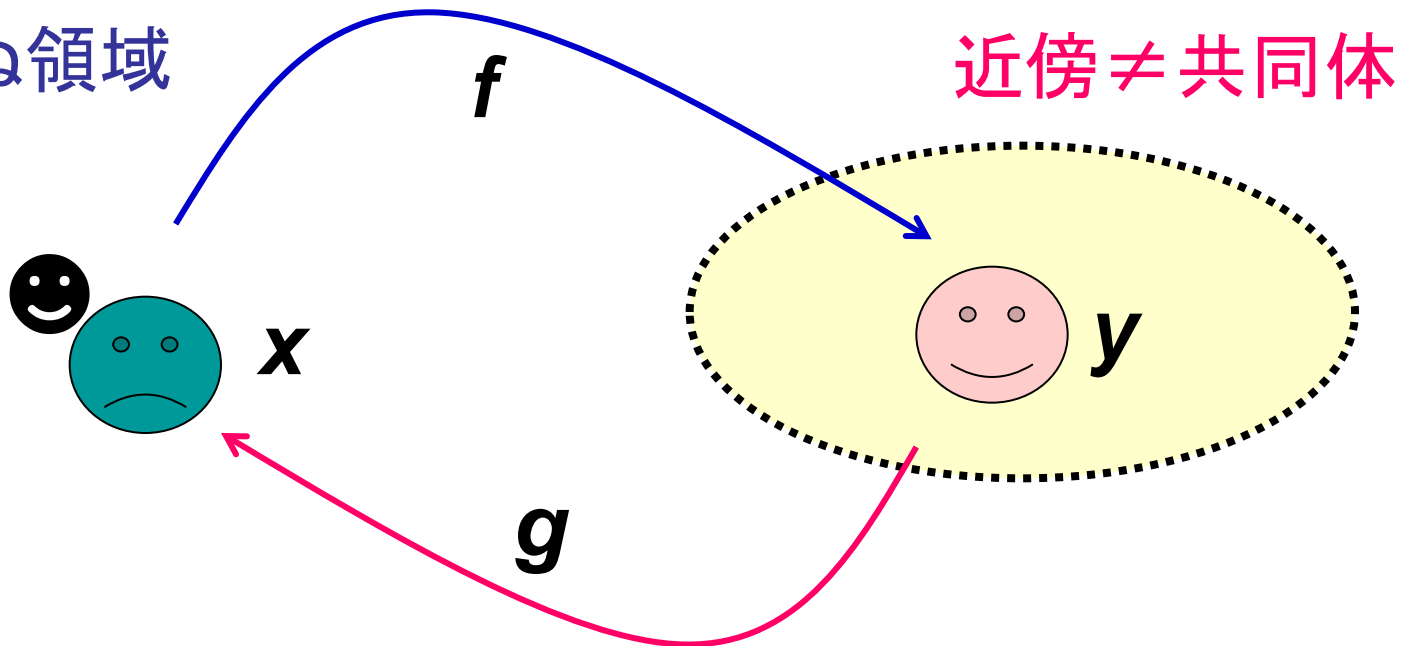


Fig. 2

1.5 事件の舞台＝キングズアボット村 ～事件の近傍～

ある閉じた世界：another world の構成

①どこにでもあるありふれた村

- a) 鉄道の大きな駅と小さな郵便局があり、よろず屋が2軒隣り合っている.
- b) 村人の趣味と娯楽 ⇒ 「噂話」(Gossip)

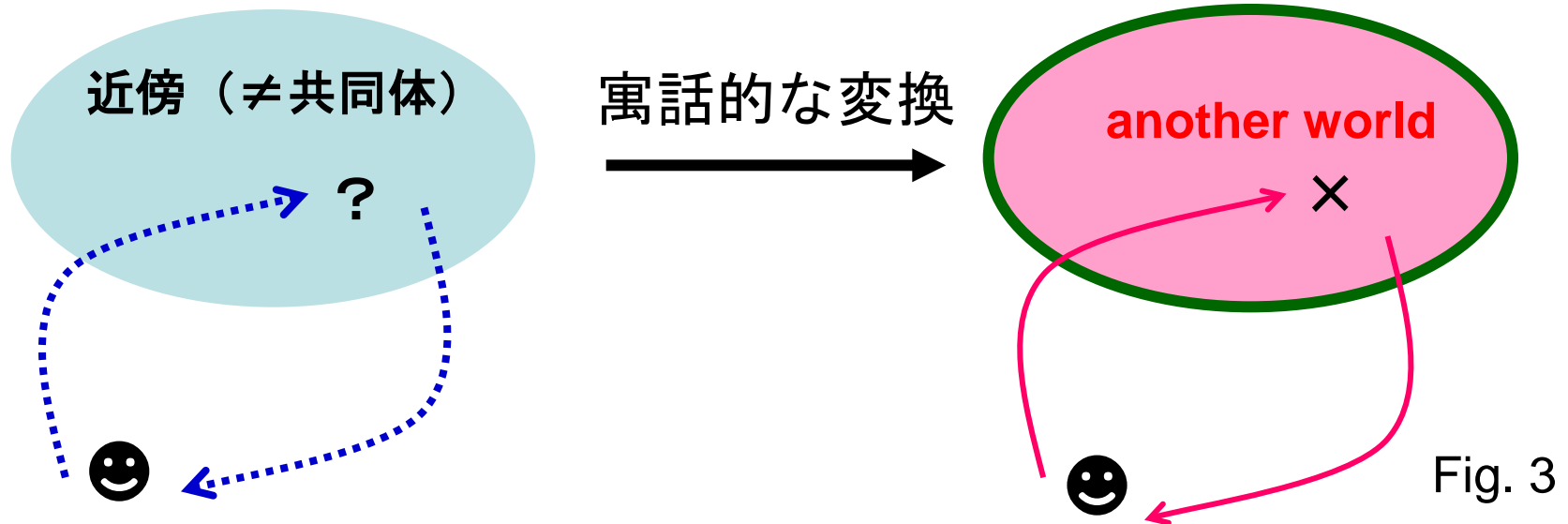
②階層：2つの大きな屋敷がある.

③時代：丈夫な男は若いうちから村を出る. 村には未婚の女性や退役軍人が残る.

1.6 「近傍」の現実 → 〈another world〉

“I felt I had suddenly strayed into another world.” (『スタイルズ荘の怪事件』)

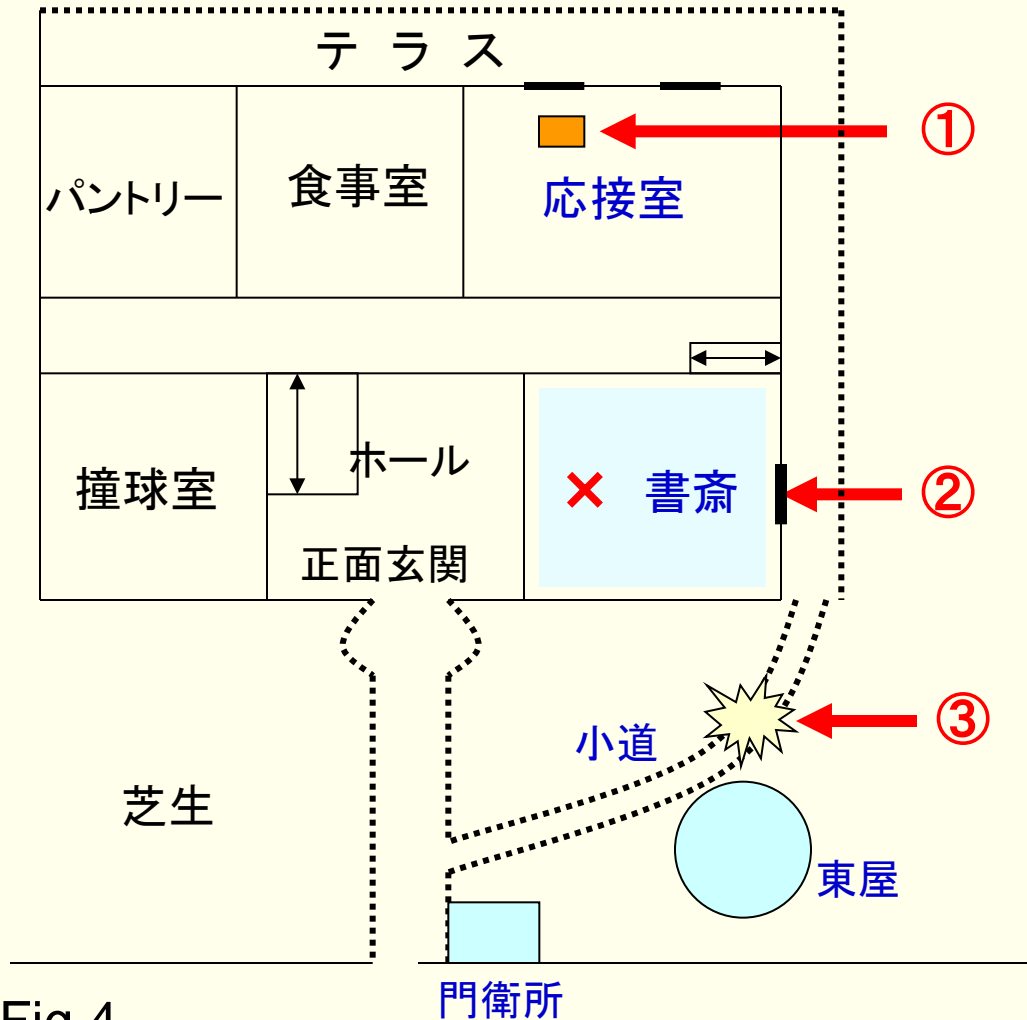
- ① 事件の潜在性 ⇒ 現実化
- ② 開いた空間 ⇒ 閉じた空間



1.7 舞台のうえの『アクロイド殺し』

- 1 **舞台化**: 1928年に、ロンドンで、Michael Mortonの脚本により、『アリバイ』というタイトルで舞台化され、Charles Laughton がポワロ役を演じる。
 - ⇒ 若いポワロが登場
 - ⇒ 恋愛物的な変形
- 2 **クリスティーの強い不満**
 - ⇒ 村の生活の中心的な表象となり、事件の鍵を握る、ミス・キャロラインが若い女性になった。

1.8 アクロイド邸の敷地と1階の平面図(略図)



①「応接室」(Drawing Room)の銀卓.

②殺人現場となつ「書斎」(STUDY)の窓.

③湧き水によって生じた小道のぬかるみ.

Fig,4

1.9 アクロイドが殺された「書斎」の状況

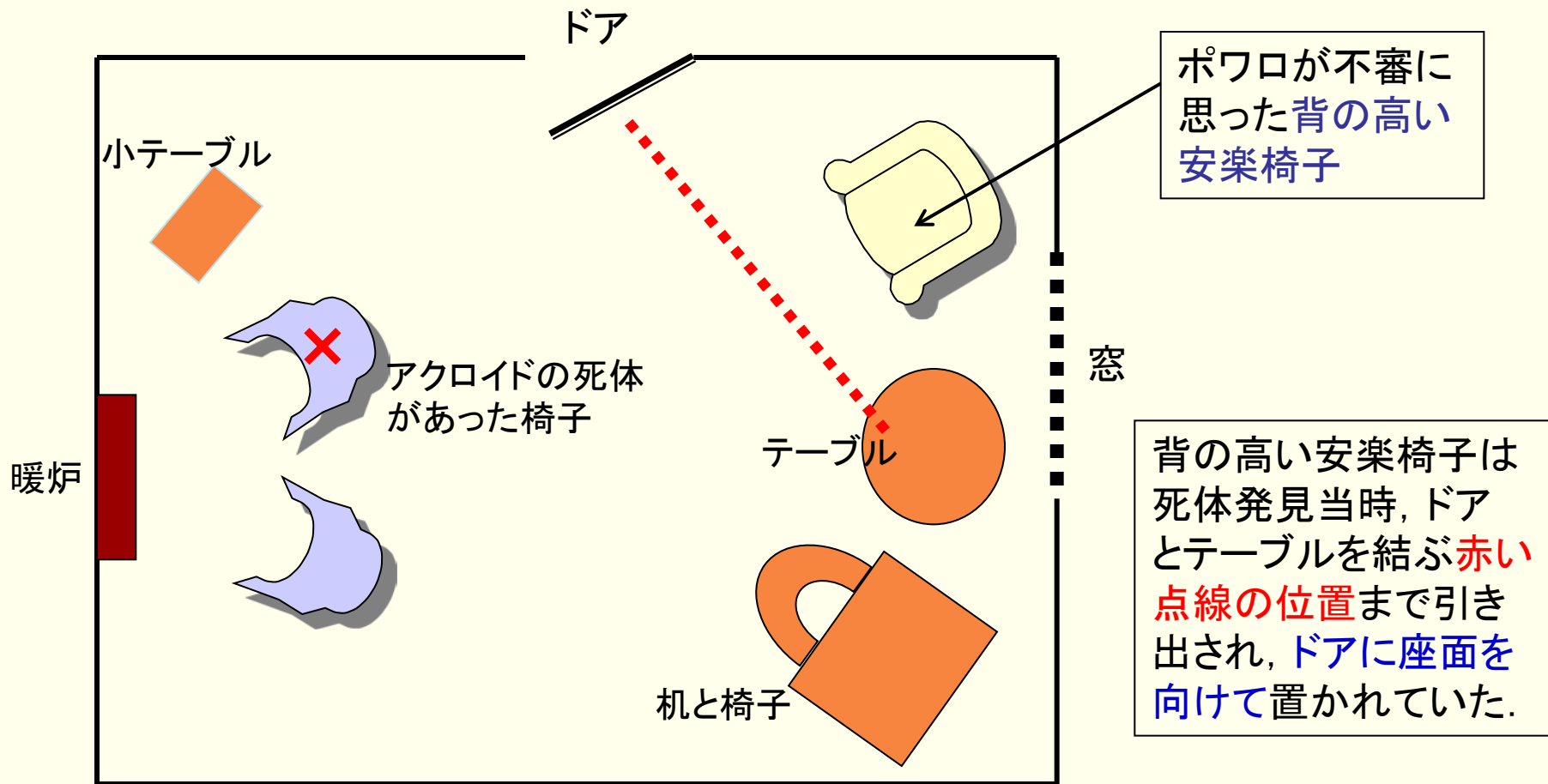


Fig.5

2.1 ポワロの推理(1)

～状況証拠／物証・・・犯人の必要条件～

A 状況証拠から

- ①**犯行の痕跡**(録音機の使用／安楽椅子の位置の変化)を消すために、真っ先に「現場に行く必要」があり、死体発見後の「数分間一人でいた」人物.
 - a) 現場で「大きな鞆」をもっていた.
 - b) 事件当夜に「電話」があることを予想できた.
- ②**時限装置**の作成能力があった人物.
- ③当日、旅館に行き、**ペイトンの靴**を盗めた人物.
- ④フローラの来る前に、**凶器の短剣**を盗めた人物.
- ⑤**アクロイドと親しい**人物.

2.2 ポワロの推理(2)

～動機について・・・犯人の必要条件～

B 動機から

- ① フェラーズ夫人が犯した犯罪(夫を毒殺したこと)を知っていた人物.
- ② フェラーズ夫人を「脅迫」して、大金を得ていた人物.
- ③ 《アクロイドがフェラーズ夫人の自殺の真相(夫の毒殺 & 脅迫による苦悩)を必ず知る》と、察知できた人物.
- ④ アクロイドの《健全で厳しい性格》を知っていた人物.

2.3 探偵小説の基本形

～3つの視線の交差～

①被害者 (empirical) *an sich*

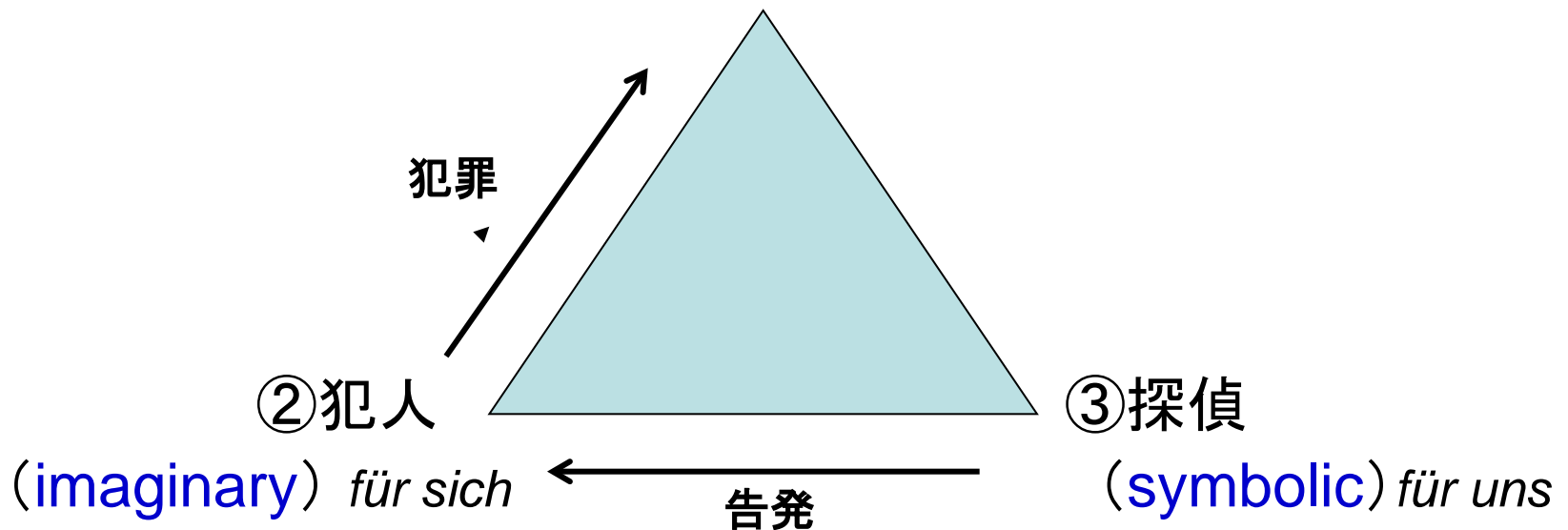


Fig.6

2.4 アクロイド事件でのポワロの推理 ～犯人と探偵のポジションの交替～

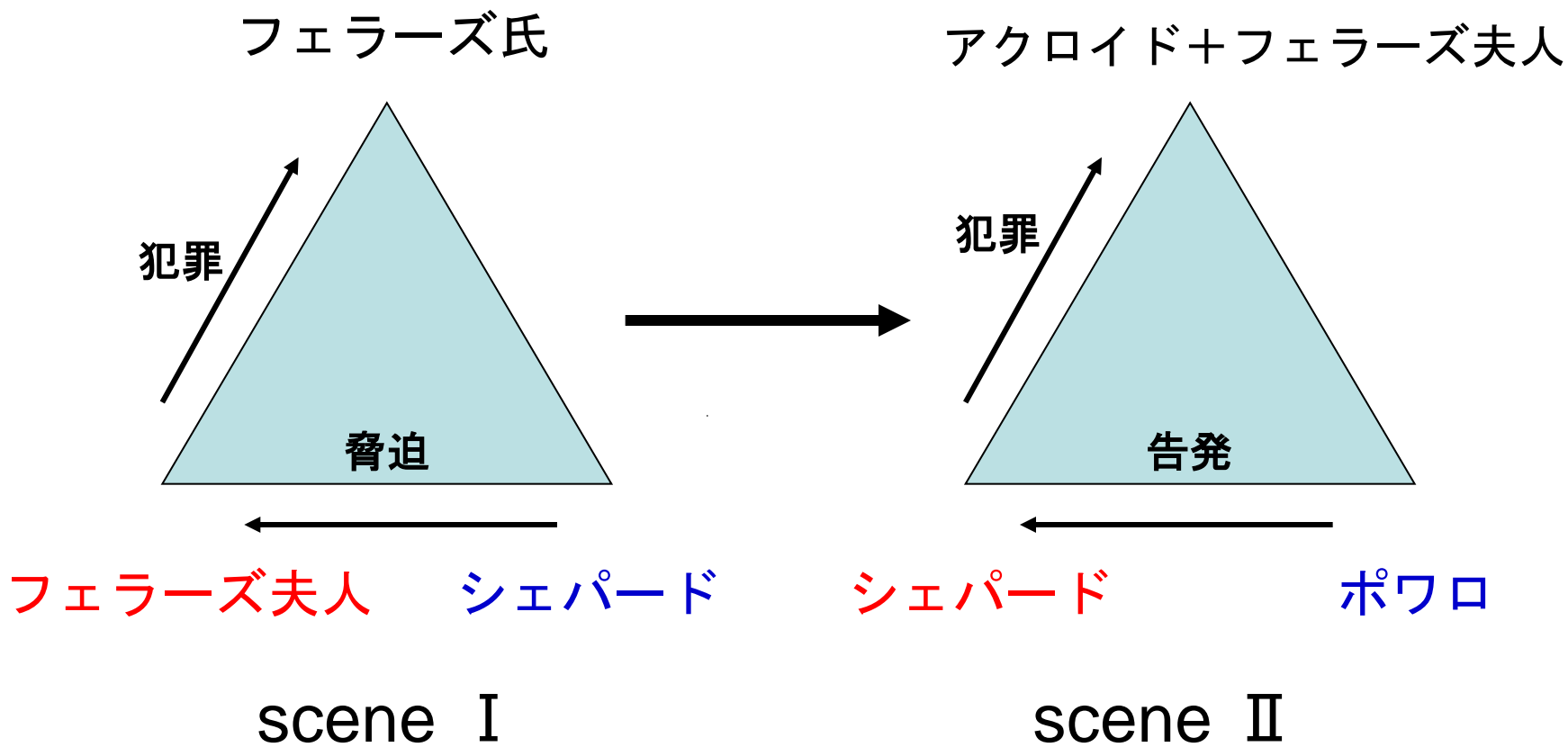


Fig.7

3.1 『アクロイド殺し』の反響

～国民的ゲームとフェアプレーの精神～

① これは探偵小説ではない。

⇒ ロナルド・ノックス:「探偵小説10戒」

⇒ ヴァン・ダイン:「探偵小説20則」

② これは離れ技の傑作である。

⇒ ハワード・ヘイクラフト『娯楽としての殺人』

③ アクロイドを誰が殺そうとかまうものか。

⇒ エドモンド・ウィルソン『ニューヨーカー』1944/12.

3.2 四項関係:《語り手》の問題

～ triangle から Quadrangle へ～

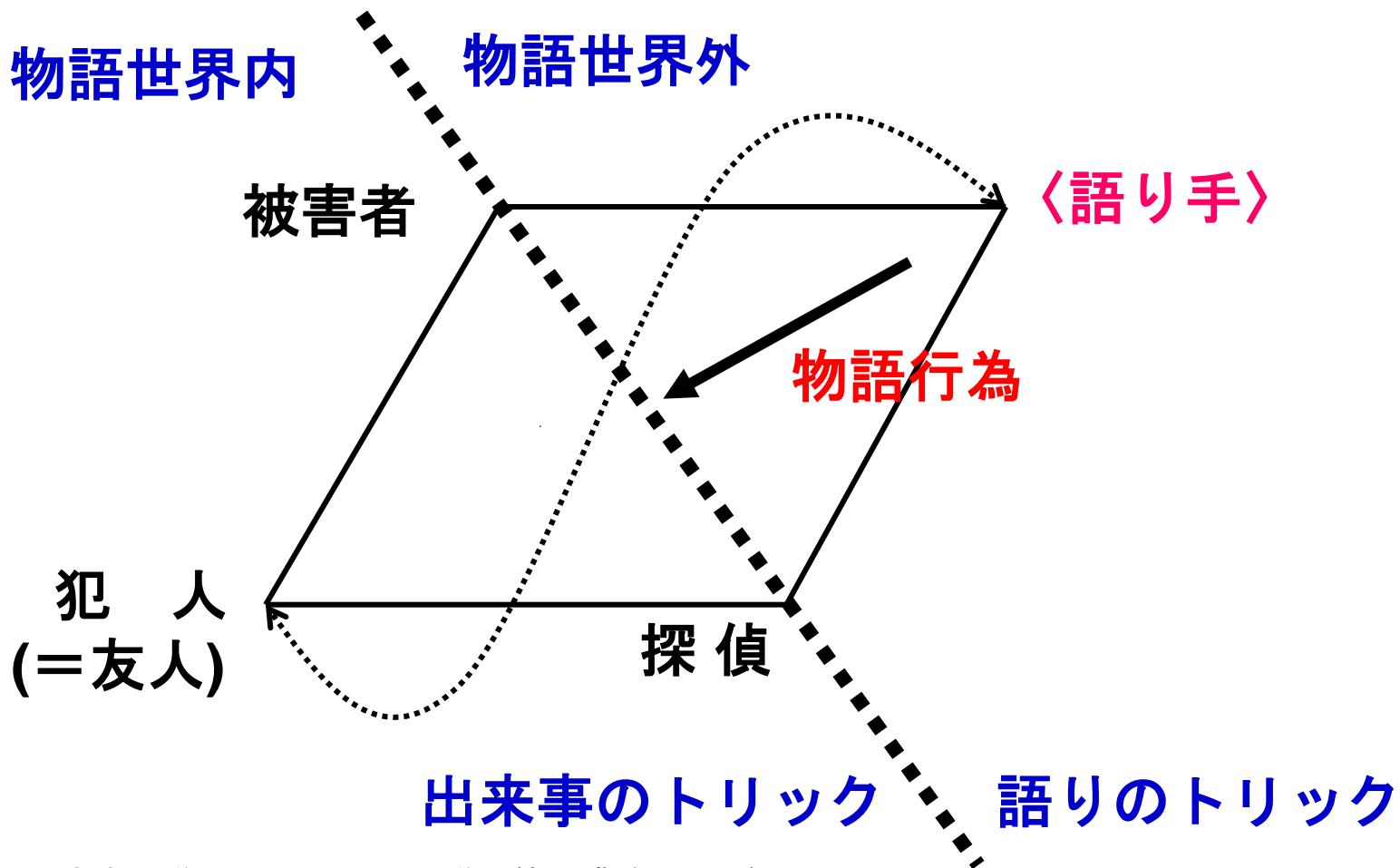


Fig.8

3.3 《語り手》は嘘をつかない(1)

～クリスティーの綿密な注意～

1 省略

- ・側行的な省略 → 黙説法
- ・時間的な省略 → 省略法

2 過剰な言葉

- ・冗説法

3 両義的な言葉

4 錯誤

5 引用

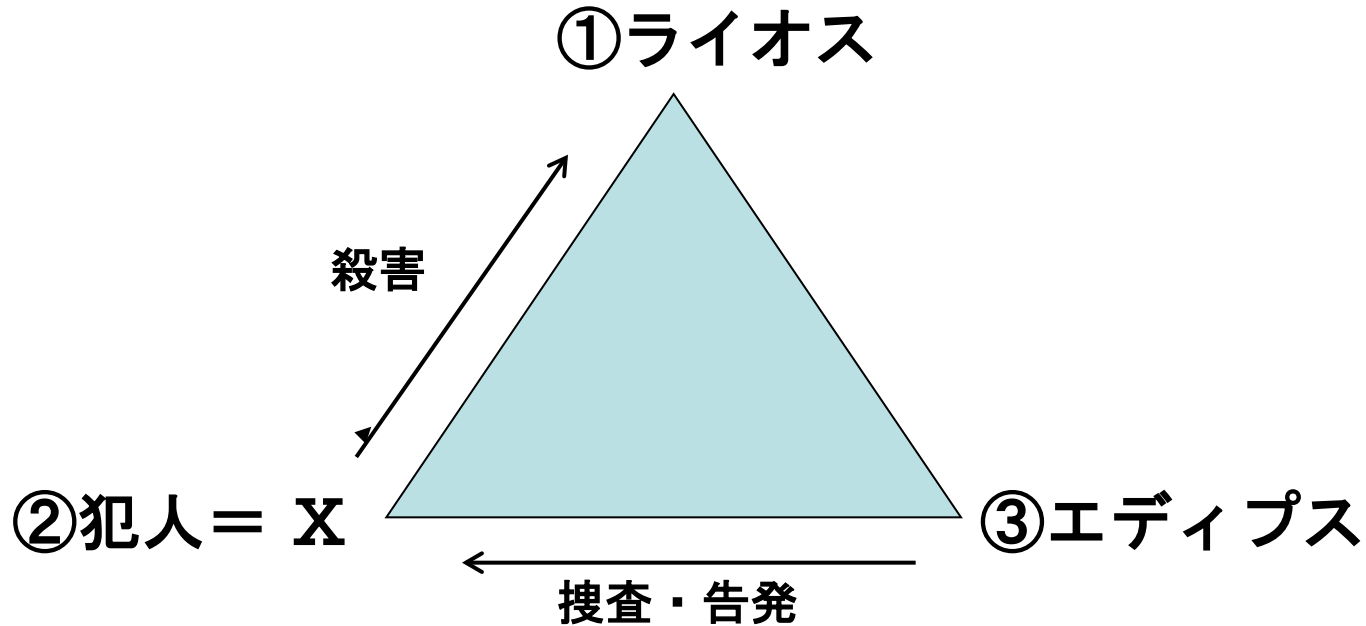
3.4 語り手は嘘をつかない（2）

～問題の10分間～

- 1 その手紙は9時20分前にアクロイドの部屋に運ばれてきた。私が部屋を出たのはちょうど9時10前で、手紙はまだ読まれないままだった。
- 2 私はドア・ノブに手をかけたまま、ためらいながら振り返り、何かし残したことはないかと考えた。何も思いつかなかった。私は首を振ると、部屋の外に出て、後ろにあるドアを閉めた。
- 3 すぐ近くにパーカーの姿を見て私は驚いた。彼はとても脂ぎった…… ずるそうな眼をしていた。
- 4 「アクロイドさんは邪魔されたくないと強く言っておられる」、私は冷やかに言った。「君にそう言うように頼まれたよ」。「承知いたしました。あの～、その、ベルが鳴ってるのを聞いたような気がしたものですから」。あまりに見えすいた嘘だったので、私はあえて答えもしなかった。
- 5 パーカーは私の先に立って玄関ホールまで案内し、…… 屋敷の門を出たとき、村の教会が9時の鐘を鳴らした。

4.1 無実のエディプス？

～S. Felman, テクストの余白を読む～



Case1 : X = エディプス (運命の甘受)

Case2 : X ≠ エディプス (事実の欠落)

Fig.9

4.2 ポワロの推理への疑問

～余白の可能性～

①物証・状況証拠

- 1) 給仕の電話の必要性？
- 2) 録音機の仕掛け・録音の内容？
- 3) ペイトンの靴の入手？
- 4) 靴跡？

②動機：殺人の有効性？

③性格：優柔不断な性格／果断な犯行？

4.3 犯人＝キャロライン説 ～バイヤールの推理から～

- ① シェパードが投機で失敗し、フェローズ夫人から、夫の毒殺を口実に、大金を「恐喝」していたことを知っていた。
- ② 誰よりも先にフェローズ夫人の死を知っていた。
- ③ フェローズ夫人が死ぬ前に、告白のため、ただ1通の手紙しか投函していないことを知っていた。
- ④ 弟の「弱い」性格を知っていた。弟を守るため、アクロイド邸に赴く。シェパードの失敗を目撃し、シェパードの退出後、アクロイドと話すも失敗、彼を殺す。

4.4 バイヤールの推理の構造

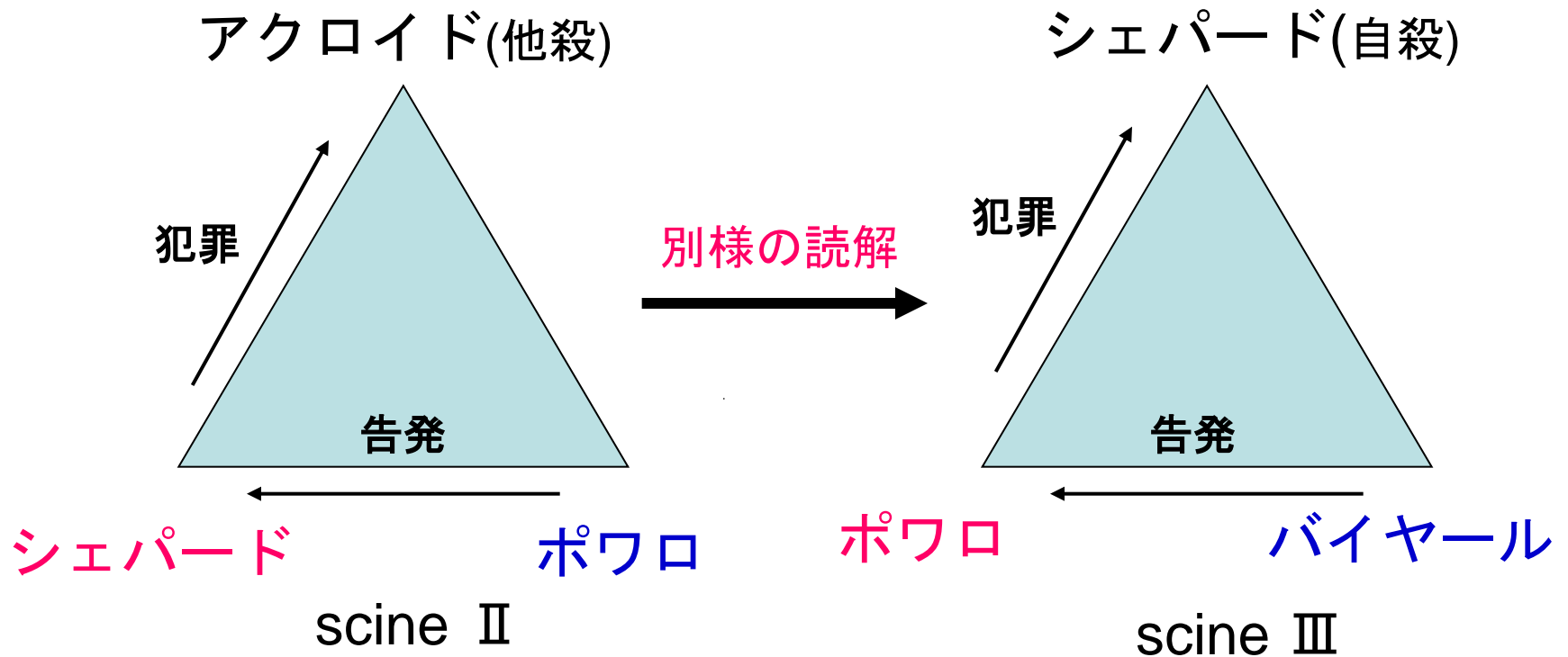


Fig.10

5.1 テクストの不確定性

～4つの問題点～

- ①「**証拠**」の不足（自白の不在，確かな物証の不足）
- ②「**動機**」にもとづく因果連関の不確定性
- ③「**性格**」（優柔不断）と犯行様態（果断）の矛盾
- ④「**探偵**」＝超越的視点の失効
⇒「**犯人**」＝語り手 → 物語世界のコントロール

5.2 〈探偵〉が超越性を奪還する試み ～ポワロの小さな集まり～

- ① 23章で、探偵ポワロは、シェパードの手記＝テキストを〈読む〉機会を与えられる。
- ② このテキストは、それを読んでおり、それについて論評する人物を、登場人物のひとりとして含むテキストとなる。
- ③ 探偵は、語り手が統御する物語世界内から抜け出し、物語世界を見下ろす超越的な位置に回帰しようとする。

5.3 〈語り手〉が超越性を回復する試み ～最後の弁明 (apology)～

最終章で、語り手は、テキスト全体に対して、外部から弁明＝独白を行う。

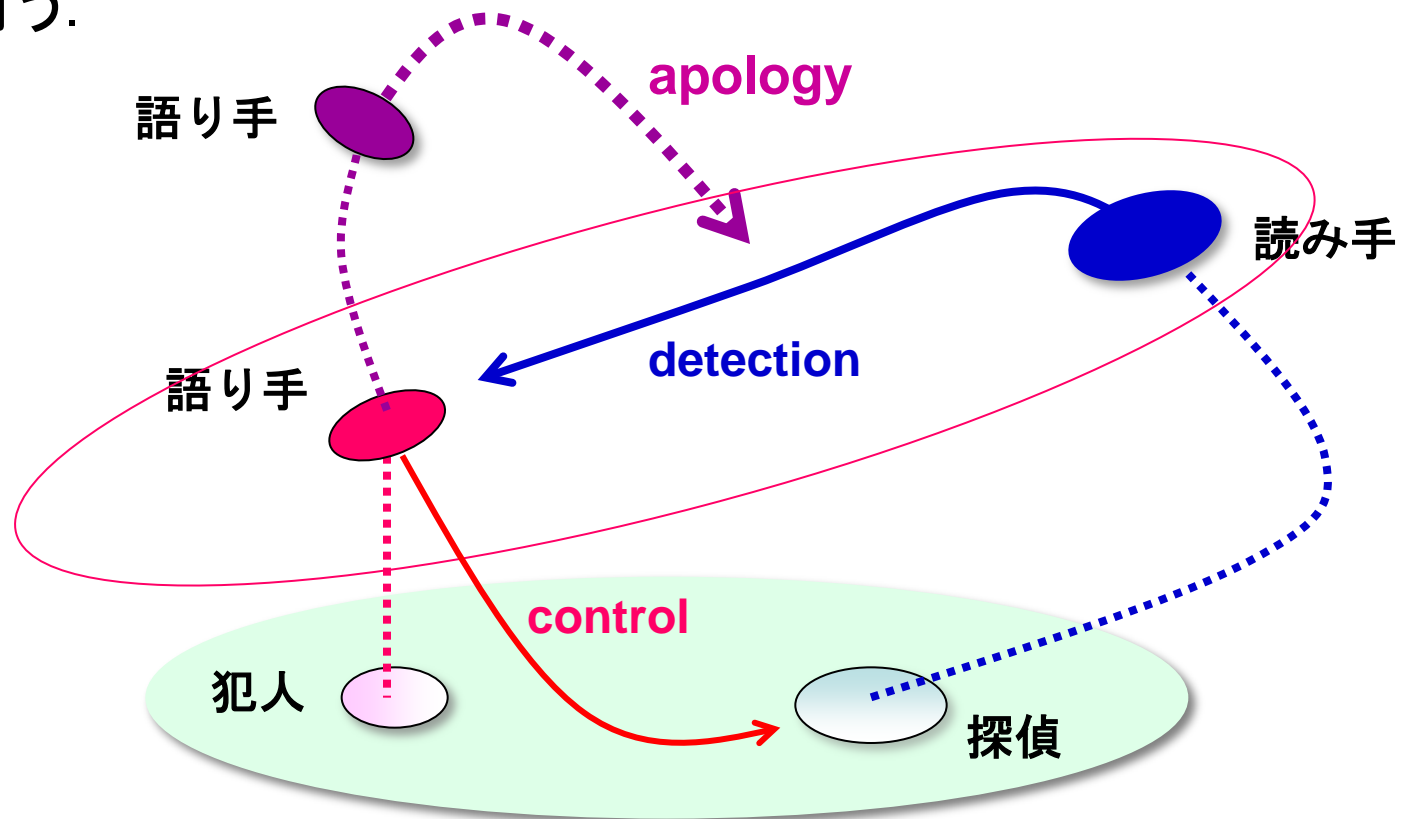


Fig.11

5.4 テクストの不安, 背後の不安

①「物語世界」／「物語行為」のあいだの境界線・分割線を失効させる行為, あるいは侵犯する行為.

⇒ こうした失効・侵犯が可能であるのは, 当の物語世界／物語行為が, じつは別の物語行為による, より大きな「物語世界内の出来事」だからではないか？

②ボルヘスの不安: 「物語の作中人物たちが読者や観客になることができるのなら, 彼らの観客であり読者であるわれわれが虚構の存在であることもあり得ないことではない」.

(中村健二訳『異端尋問』晶文社)

Bibliography

- 1 内田隆三『探偵小説の社会学』岩波書店, 2001年.
- 2 ホルヘ・ルイス・ボルヘス『異端審問』(中村健二訳), 晶文社, 1982.
- 3 Bayard, Pierre, *Qui a tué Roger Ackroyd?*, Minuit, 1998.
- 4 Bellemin-Noël, Jean, Hercule Poirot exécuté, ou la fin des paradoxes: Pierre Bayard, *Qui a tué Roger Ackroyd?*, in *Critique*, No.618, 1998.
- 5 Felman, Shoshana, De Sophocle à Japrizot (via Freud), ou pourquoi le policier, in *Littérature*, No. 49, 1983.
- 6 Genette, Gérard, *Figure III*, Seuil, 1972.
- 7 Meyer-Minnemann, K. & Schlickers, S., La mise en abyme en narratologie, in *Vox Poetica*, 2004: <http://www.vox-poetica.org/t/menabyme.html>.
- 8 Muller, J. P. & Richardson, W. J., (eds), *The Purloined Poe: Lacan, Derrida, and Psychoanalytic Reading*, The Johns Hopkins Univ. Press, 1988.
- 9 Wagstaff, V. & Poole, S., *Agatha Christie: A Reader's Companion*, Aurum, 2004.
- 10 Wolf, Werner, Metalepsis as a Transgeneric and Transmedial Phenomenon, in *Narratologia* 6, 2005.